
冬の始まりは彼女と共に。

零・ZA・音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬の始まりは彼女と共に。

【著者名】

N4057B

【作者名】

零・ZA・音

【あらすじ】

ある朝の出来事。俺とあいつの少し変わった恋の結末。

吹き抜ける風に冷たさを纏つた空気が、暴れながら通り過ぎていく。

田に入る風景は紅葉レッドリーフして、次第に茶色の枝が目立つ事になるだろう。

う。

冬はもうすぐそこまで、やつて来ているのだから。

俺が歩けば、後ろから同じような歩調で歩いてくる足音が聞こえる。止まれば、その足音も止まる。

ストーカー？

なんて男の俺が、そんな心配をする必要はない。そもそも、ストーカーでもないしな。

大体、今は朝だ。これから学校へ向かおうと、通学路を歩いているだけ。しかし、このストーカーもどきは、家からずっと着いてくるのだから、まったく困ったものである。

「……なあ」

振り向きもせずに呼んでみたが、どうやら動搖しているようだ。後ろで慌てふためく声と音がしている。

あ、どうやら転んだみたいだ。少し鼻をする音が聞こえる。俺が話し掛けたのが、そんなに驚く事か？

「何をやっているんだ？ お前は」

「べ、べつに？」

小さく雑踏の音に搔き消されそうな声。ここいつの声はいつも思つが、聞き取りづらい。

でもこれが、こいつの精一杯の声なんだ。

だから俺はその一言一言を聞き逃さないよつに、しっかりと耳を傾ける。

しかし、何故に疑問に疑問で返す。別に、は答えになつてない

だろう。

まあ、聞いても答えてはくれないと思つたが……。

「そうか。なら、いいけど」

「ふえ……ひづく……」「……

しかし、今日は予想外の事が起きていた。後ろから聞こえてきたのは、まさかの嗚咽。

慌てて後ろに向くと、顔を覆っている姿が目に飛び込んできた。

「ちょ、おい！ 何を泣いてるんだよ、みう美優」

「だつてえ……。お、おにいちゃん、おこつて、るん……だもん」

目元を擦りながら必死に喋っているが、言葉になっていない。

まったく、こいつは高校一年生になつても、泣き虫だけは変わらないって事か。

いつもは、これぐらいでは泣かないせに、今日はまだどこでスイッチが入ったんだかね。

「怒つてないから、涙を拭け。みんな見てるぞ」

「あう……。お兄ちゃん、い、いめんねえ」

周囲から冷やかな視線を向けられているのは、俺。別に俺が泣かしたわけじゃないぞ。

頭をポンポンと叩いている俺を見上げるその瞳には、まだ薄っすらと涙が浮かんでいる。

まったく、世話のかかる奴だ。ちょっと荒っぽく涙を拭つてやると、慌てたような顔をして俯いてしまった。

「ふう、まったく。それで……一体、俺が何に怒つてると思つたんだ？」

「そ、それは……」

少しだけ顔を上げて、俺の顔色を伺つよくな視線を向けてくる美優。

何を怯えているのか知らないけど、俺は心当たりがないんだがね。まったく、何をしたんだよ……こいつは。

「お兄ちゃんの……大切な、プリン食べちゃった、から

唚然としました。

何を泣いているのか、思えばそんな事かよ って、何！

「食べたつて……、あの、俺の大好物の『とろけて幸せ プルンプリン』を食つたのかつ」

「ひやう！ だ、だつて、おいしそうだつたから

「あれは、大事に取つて置いたものなんだぞ！ 一個、500円もする超高級品プリンをつ」

「はう、『めんなさいっ』

頭を抱えてうずくまっている美優に、怒りの制裁を加えないと気がすまない。

だが、今日はよし、とするか。まったく、ろくな事をしない奴だな。

「つたぐ……。食べたものは、しょうがないか」

だけど今回は、正直に答えたので勘弁してやるわ。

いつもは、なんだかんだ言つて、素直には話してくれない奴だから、今日は奇跡に近い。

しかし、いつの間に俺の家に侵入したんだよ。隣の家からそんなに簡単に入れたかな？ 俺の家つて……。

一応、勘違いが無いように言つておくが、こいつは俺の妹ではない。隣の家の娘つ子だ。

子供の頃から一緒にいるので、俺の事を「お兄ちゃん」と呼んでいるわけだ。

「そ、それでね……」

「なんだ？ まだ、何かあるのかよ？」

そう聞くと、俺を見上げながら涙を目にいっぱい浮かべている美優。なんで、そんなに潤んだ瞳をしているんだ。

これはまた、なんとも言えない表情だな。お兄ちゃん、変な道に走っちゃうぞ？

「お兄ちゃんの大切にしてた……ロボット、壊しちゃうわあ～ん」

最後は泣き声と一緒になつて、何を言つてゐるのか、さっぱりだつたけど犯人は、やつぱりこいつか。

確かに、俺の部屋には子供の頃から、大切にしているロボットのプラモデルがある。

それが昨日見たら、見事に腕だけが取れていた時には、正直驚いたが誰がやつたかと考へる前に、こいつの顔が浮かんできた。

でも、あれは子供の頃に俺が壊したから、腕は元から壊れていたんだ。

だから、こいつが壊したわけではないんだが それでも、こいつは自分が壊してしまった、と思つてゐるんだね。

それにしても、俺がいる時には絶対に入つてこようとはしないくせに、いない時にはいつの間にか入つて、俺の部屋の中を荒らしていくとんでもない輩だ。まったく、何をしてゐるんだかね。

「……まつたく。それは、知つてるよ。お前以外に誰がいるんだよ」「い、ごめんなさい……」

「いいから、立てつて。別に怒つてないから」

一向に立ち上がらうとしない美優は、俺から視線を逸らして座り込んだまま。

冷たいはずの地面に座り込んで、完全ストライキ状態。また、始まつたのか？

泣き虫のくせに、意地つ張り。

「ほら……汚れるぞ？ それに冷たいだろ？」「

手を差し出しても掴まろうとせずに、じつと俺の手を見ているだけ。

手相でも見れるのか？

たぶん、俺の運勢は今日は最悪のはずだ。これが、最悪の原因なんだがね。

本当に意地つ張りな奴だ、こいつは。

「別に俺は怒つてないんだぞ？」

「うう……」

唸らないで、立ち上がってくれよ。周りはすっかりと静かになつて、誰もいなんだぞ？

遠くて、学校のチャイムが聞こえているし、勘弁してくれ。完璧な遅刻ではないか。

俺、皆勤賞狙っていたのに。

「美優」

しゃがみ込んで美優の顔を覗き込むと、真っ赤になつて顔を背けて行く。

本当に、分かり易い反応をする奴だ。まったく、俺がお前の気持ちを知らない、とでも思つているのか？

あれだけ露骨にされたら、幾ら鈍感な俺でも気付く、てものだ。もう少し、まともな気の引き方が出来ないものかね。

痛いくらいに、真っ直ぐな気持ちをぶつけてくれる奴。

おかしくて、笑いそうになつてくる。俺をチラチラと見ては、また視線を逸らして俯いてはの繰り返し。泣き虫の女の子。それだけなら可愛いけど、憎たらしいほどの意地つ張り。

そして、不器用な気持ちを俺にではなく、俺の持ち物にぶつける。ものすごい二拍子だと思うぞ？ これ。

ちゃんと、俺にぶつけてくればいいのに。いや、そうすると俺が恥ずかしいか……。

「まったく、そこまで意地つ張りだと……彼氏なんか、出来ないぞ

？」

「え？」

「ほら、掴まれ

立ち上がりしていく俺を、驚いている美優が顔を上げる。差し出している俺の手を、それでも掴まろうとしない。さすがの俺も、これではお手上げだぞ。

まったく、はつきり言葉にしてくれば、俺も反応しやすんだがまつたく。……。

いや、俺がはつきりすればいいだけの事か？　こいつの気持ちなんて、昔から気付いていたから。

「しょうがないな……」俺は、行くぞ

「……え。あ、あ

ちょっと意地悪をして、踵を返して行こうとしている俺を、明らかに動搖した声と視線を向けてくる美優。

その辺には、すでに光るもののがたまっている。置いて行かれるは嫌……と言つ事か。

まったく、世話がかかる奴だ。それでも嫌いになれないのは、俺もこいつと同じ気持ちだからだろうな。

「ふう……、みつけられじょ
「ひや」

短い悲鳴を上げて固まっている美優は、目をパチクリとさせて俺の顔を見ていた。

あまりに立ち上がりたくないのに、思い切つて抱き上げてやった。俗にお姫様だつていうやつだ。

「へ……？」え、へ？」

鳩が豆鉄砲を食らつたって、いうこの顔を言つんだろうな。

ちょっと、悪戯をしてやるづかと思つほどで、間抜けな顔をして呆けている。

でも、そんな顔も俺は愛しいと思つていい。

「どうした？　そんなに驚いて、鼻水出てるんだ？

「へ……？」う、うそ……はわわわ

慌てふためいている美優の顔に、近づいて耳元にそっと囁く。

「あんまり、俺を困らせるな……、美優」

一瞬、キヨトンとした顔をした美優だが、俺の顔が近くにあるので顔が真っ赤になっていく。

中々、面白いぞ。

「それから、俺の物を壊すのは止めてくれよ？ 俺も困るから」「あう……。ご、ごめんな、さい」

段々と縮こまつっていく美優。身体を丸めて申し訳なさそうに俺を見ているが、顔は未だに真っ赤だ。

「それから、ちゃんと俺の目を見て『好き』って、『言え』」「え、あ、はい。へ、え？ え、ええええ！」

面白い奴だ。この顔は是非デジカメで押さえなおきたい顔だ。湯気を上げて茹で上がった、タコのように真っ赤に染まっている。ちょっと意地悪かとは思うけど、この際だから言つておこう。「お前が、何をしたいのか知らないとも、思つていたのか？」「はう……」

驚きに見開かれた目というのには、面白いものだ。

それにしても、あれだけ色んな事をやっておいて、俺がまったく気が付かないと思っている美優もすごいな。

俺だつて馬鹿じゃないぞ？

「まあ……、今までも、俺は構わないぞ？」

「え、あ……。えつと、その」

「言葉のままだ。俺は、今までも構わない……。お前が、そばにいてくれたらな

恥ずかしいが、こいつからの告白を待っていたら、いつまで待つか分からない。

それどころか、今まで待つても、あのままのかも知れない。それなら、それでもいい。

俺は、この気持ちを変えるつもりはない。だから、ここに止まること理に変わつて欲しくない。

「俺のそばから離れなければ、それでいいよ……」

驚いている顔が更に驚きを表していく。しかし、それが次第に歪んで瞳が潤んでくる。

口が微かに動いて、何かを言つているように見えるが、何も声は聞こえてこない。

でも、声の変わりに伝わってきたもの。

「ほんとに……いいの」

「ああ、お前が良ければ好きだけ、いればいい」

耳のそばで聞こえる嗚咽に、思わず笑みがこぼれてしまつ。

泣きながら俺に抱きついている美優は、更に力をこめていく。その強さが気持ちの表れだと思つ。

「うん……。ずっと一緒にいるよ」

その声が俺の耳をくすぐり、胸を満たしていく。

泣き虫で意地っ張りで、ちょっと我が儘だけど俺の可愛いお姫様。朝から何をしているのかと思われるかも知れないけど、俺はこれでいい。

俺達には、少し変わったのがお似合いだろうからな。

「ところで、このまま行くのか？」
「わ、わたしは……このままで」

三拍子に、これ追加。

真つ赤な顔のお姫様は、意外と大胆なようだ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4057b/>

冬の始まりは彼女と共に。

2010年10月8日15時36分発行